

ミニフォーラム

造園学における量的研究と質的研究の融合に向けて

企画責任者：園田 陽一 道路生態研究会 / 株式会社地域環境計画 浜 泰一 東京大学
長濱 和代 日本経済大学 三島らすな 明治大学大学院

1. 企画趣旨

科学論文においては、十分な定量的なデータに基づいて統計的に平均値、中央値といった値から Generality (一般則) を求める「量的研究」が重要視されてきた。しかし、研究成果を社会に実装するためには、データの外れ値として省かれるような情報も重要な意味を持つこともある。「質的研究法」の始まりは、対象によっては量的研究の適用が難しく、実験や統計には適さない研究課題について、具体的な人に焦点をあて、その現象を克明に記録、解明する研究に基づいている。

造園学の分野では、質的研究と量的研究の両側面の研究が行われてきたが、それらの多くの研究は独立して行われてきた。本ミニフォーラムでは、質的研究と量的研究の両側面から実践している研究者から事例報告を行い、量的研究と質的研究の融合が造園学研究にどのように貢献するかについての議論を行った。

2. 事例報告

「造園学に貢献する質的研究～「動物園と質的研究」を事例に～」
高橋宏之 (千葉市動物園)

動物園で行われている質的研究法は、エスノグラフィーによる展示の評価や来園者調査であり、来園者の会話を通して、展示を通じた植物園側の意図するメッセージをきちんと受け取っているかどうかを調べることや、来園者の園内での動き (行動パターン) を追跡することで、どの展示が注目されているのかを把握することができる。

「造園学に貢献する質的研究法～体験の場の評価を事例に～」
三島らすな (明治大学大学院)

生物多様性普及効果の観点から、自然体験イベントの評価事例を紹介した。「体験の場」の評価に対して量的アプローチと質的アプローチを使い分けることにより、参加者の生物多様性に対するイメージの内容やその変化を評価した。

「1900年代の宮古島におけるモクマオウ植林について～質的研究法を用いたアプローチ～」
安井瞭 (東京大学大学院)

1900年代に宮古島に移入されたモクマオウを対象に、その導入の経緯を把握した。公文書だけではなく、写真などの資料や聞き取りも用いた質的研究のアプローチを取り入れることで、モクマオウの植林の背景を詳細に把握することができ、過去のランドスケープ再現の可能性を示した。

話題提供「質的研究を量的に考える理由」

浜泰一 (東京大学)

質的研究の対象は、「言葉」の集合であり、集合の要素 (それぞれの言葉) には、順序をつけることができる。言葉には順序が与えられて、はじめて解釈することが可能になる。その解釈は、関係の大きさを表す順序に基づくことを意識することが重要である。そしてその順序は、研究者の裁量により自由につけられるものであるが、規準を明確にすることが大切であり、社会的にも認められていることが望ましい。

コメント「質的研究の貢献可能な視点」

長濱和代 (環境探究学研究会 / 日本経済大学)

量的研究と質的研究はどちらも演繹的、帰納的の関係にあり、相補的というよりは、双方が循環するような関係であり、相互に補いあう関係から、らせん階段のように循環して深化を遂げることが可能である。つまり結果の解釈を両手法により相補的に行うことによって、量的研究のみで埋没してしまうような情報を顕在化することができるのではないだろうか。例えば、エスノグラフィーは、文化人類学や社会学、心理学で使われる研究手法の1つで、対象となる部族や民族の「文化」における特徴や日常的な行動様式を詳細に記述する方法のことを指す。今日では、学問領域における民族の文化理解に留まらず、エスノグラフィーをさまざまな領域に採用し、生活者の一層の理解に役立てようとする取り組みが活発となっている。エスノグラフィー調査では人の行動を詳細に観察することで問題やニーズの発見に努めることから、そこで得られた情報は、造園学研究の幅を広げると考える。

3. まとめ

(1) 量的研究法が重視される分野への質的研究の貢献

量的とは統計的にいえば、順序尺度や間隔尺度、比例尺度のものを扱うが、質的研究では名義尺度にどのようにルールを設けて、定量的評価を行うのかという点がポイントである。

(2) 造園学の分野において、どのように生かされるか。

プロダクトデザインや造園設計施工管理における評価の技術として、意匠や景観などの分野では、印象評価ではSD法と因子分析などが行われてきたが、質的研究はその人の感じた言葉に基づいた解析が行うことが可能である。例えば、印象評価のように、順序化できないようなデータにどのように意味づけができるのか、その意味付けによって、結果の解釈が両手法により相補的に行うことによって、量的研究のみで埋没してしまうような情報を顕在化することができるのではないかと考える。

(文責：園田陽一)